腐蝕洩れの最も著しかったのは26番の竜頭付近であった。　これが余りにも見苦しかったので，竜頭付近の再刻修正が行なわれた。　この修正は竜200文の腕加刻の様に円滑にはゆかず，結果修正ヶ所に常に滲みが見られ，他の部分よりも濃く印刷されている。　従って，この原因は単なる水素気泡のためだけではなく，その部分の銅の不純物が偏折した巣にあったと考えられる。　即ち，巣があれば，腐蝕がさまたげられるのは勿論，再刻後もインキの滲みが起り易いのは当然であろう。

26番の再刻修正は相等早期に行われたらしく，腐蝕洩れのある済単片は現在まで唯２枚しか発見されていない。(第60図)　未使用ではこれを含むシートが唯１枚現存している。(第61図)　修正直後のものは未だ滲みも少く，一見図案が完全に見え，過去これを“破損前の完全図案”と勘違いをしていた向きもあったが，この機会にこの原因を明確にする事によって，この誤解をといておきたい。